教師の自己省察と専門性開発を支援する教員研修の実際

岐阜県総合教育センター

Ⅰ　平成18年度岐阜県総合教育センター研修の重点

学校教育の成否は教師如何で決まるといっても過言ではない。そのため，いつの時代でも教師の資質能力の向上が求められるが，とりわけ社会の大きな変動期を迎えている今はこれまで以上にその要求は強い。特に昨今，学校では，規範意識の低下，いじめに対する対応，ＬＤやＡＤＨＤ等の生徒への支援など新たな課題が生じ，教師に求められる資質能力は広範多岐にわたっている。このような中，教育界の動向（各種答申等からの教育の流れ）や県の重点施策を把握し，今日的課題を見極めるとともに，校長会等からの要望及び学校訪問やアンケート調査から得られた要望など学校や受講者のニーズを受け止め，研修を企画することが岐阜県総合教育センターの使命である。

平成18年度は，基本方針「個々の教員の課題に応じたきめ細かい研修を推進し，教員全体のレベルアップを図る。」の基に，①中堅教員の指導力の向上による学校の活性化，②自校の課題解決を図る校内研修の推進,③教育用コンテンツの積極的な活用と情報モラルに関する研修の充実，④食育・環境教育体験に関する研修の推進の４つの基本戦略を柱に，基本研修講座（悉皆研修）を44講座，専門研修講座（希望研修）を113講座開講した。（表１，図１）

現在，岐阜県総合教育センターでは，受講者の研修効果を高めるために，実施する講座の研修スタイルの転換を図っている。講師が主役の講義中心の研修から，受講者が主役となり，自らの経験や実績を生かすことのできる参加型研修への転換である。仮に,講義中心の研修であっても，受講者同士で話し合い発表する場面や深く思考できるような場面を設けるなど受講者が受け身とならないように工夫している。

講義中心の研修では，受講者は知識や技能等多くの研修内容を詰め込むが，それを自らの言葉に置き換えて表現するなど研修を振り返る機会が少ない。そのため，学校現場へ研修内容を持ち帰った際，学んだ内容を十分に活用できていない受講者もいることを耳にする。このようなことを解消するためには，研修の中に自己の振り返りの場面を設定し，グループ等で協議する場面を通して，受講者自らが過去の経験や実績から主体的に課題を発見する。発見された課題に対し受講者相互で解決策を作成する。さらにその解決策を学校現場で実践し,その効果を検証した上で，新たな課題を見つけ，新たな解決策作成を見つけていくという一連のサイクルにおいて受講者の資質能力や指導力をお互いに高め合うことができるのではないかと考えている。

表１

平成18年度岐阜県総合教育センター研修講座

①基本研修　　（受講者数は平成19年３月12日現在）

種別		講座数	対象校種	受講者数	備考
経験年数研修	初任者研修（含・養護教諭，栄養職員）	8	幼･小･中･高･特	551	宿泊研修含む
	３年目研修	4	小・中・高・特	308	
	６年目研修（含・養護教諭）	5	小・中・高・特	194	岐阜大学連携
	９年目研修（中堅教員社会体験研修）	4	小・中・高・特	226	民間企業等
	12年目研修（含・養護教諭，栄養職員）	7	幼･小･中･高･特	318	岐阜大学等連携
	常勤講師研修	4	小・中・高・特	478	
職務研修	新任校長研修	2	小・中・高・特	81	
	新任教頭研修	2	小・中・高・特	98	
	新任部主事研修	1	特	5	
	新任教務主任研修	2	小・中・高・特	97	
	新任生徒指導主事研修	1	高・特	18	
	新任進路指導主事研修	1	高・特	19	
	特殊教育通級指導教室新任担当教員研修	2	小・中	98	
	盲・聾・養護学校新任担当教員研修	1	特	8	
計		44		2499	

②専門研修

種別		講座数	対象校種	受講者数
専門性を高める講座	中堅教員学校組織マネジメント講座，学校組織マネジメント能力育成講座，キャリア教育，授業力向上講座，校内研修推進リーダー養成講座，学校栄養職員のための食育に関する講座，市町村教員研修指導者養成講座，特別支援教育講座　等	60	幼･小･中･高･特，専・各	1810
情報関係講座	コンピュータを活用した授業実践研修講座，授業・評価に生かす情報研修講座，教育情報の管理運用講座，県立学校情報化推進担当者研修	21	幼･小･中･高･特，専・各	534
体験学習関係講座	食育関連講座（育てて食べる，食を考える），環境教育関連講座（環境教育の進め方，身近な自然に親しむ），植物育種，花のある学校づくり　等	29	幼･小･中･高･特	364
計		110		2708

③特別研修

種別	講座数	対象校種	受講者数
夏季特別フォーラム	1	小・中・高・特，専・各	214
重点講話	2	小・中・高・特，専・各	291
計	3		505

図１

平成18年度　教員研修の基本方針

重点施策

個々の教員の課題に応じたきめ細かな研修を推進し、教員全体のレベルアップを図る

目指す教師像

① 高い使命感と職業観を有し、絶えず自己研鑽に努める教師
② 子どもの能力や個性を伸ばす教育技術を有する教師
③ 学校組織の一員としての自覚をもち、よりよい学校をつくろうと努める教師
④ 人間性豊かで、誰からも信頼される教師

ライフ・ステージに応じた

基本研修

常勤講師

経年研修

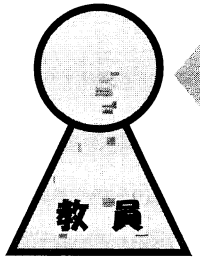
- **初任者**　教育活動の基礎・基本の習得　校外 25日　校内180時間
- **2年目**　校内 5日
- **3年目**　教員としての基礎的資質や能力の向上　校外 3日　校内 2日
- 大学連携 **6年目**　教科及び校務の実践的指導力の向上　校外 3日　校内 5日
- 社会体験 **9年目**　社会の構成員としての視野の拡大　校外 5日
- 大学連携 **12年目**　リーダーとしての自覚と個々の能力や適性に応じた指導力の向上　校外 15日　校内 20日

職務研修

- 新任生徒指導主事
- 新任教務主任
- 新任進路指導主事
- 新任校長
- 新任教頭

3年間で一人前の教師を育てる

目指す教師像



県の重点施策・今日的課題を踏まえた

専門研修

- ○教員の実践的指導力の向上を図る研修
- ○児童生徒の夢や才能を伸ばす教育を実現するための研修
- ○教育の社会的要請に応える研修

基本戦略

- ★中堅教員の指導力の向上による学校の活性化
- ★自校の課題解決を図る校内研修の推進
- ★教育用コンテンツの積極的な活用と情報モラルに関する研修の充実
- ★食育・環境教育体験に関する研修の推進

NEW **中堅教員支援研修**　12年目以降の中堅教員を対象にした指導力の向上

育児休業復帰支援研修[少子化対策事業]
・育児休業中の教員を対象にした職場復帰研修

NEW **校内研修推進リーダー養成研修**
・校内研修を推進するためのリーダーの養成

教育の情報化推進リーダー養成研修
・情報モラルや情報リテラシーの校内研修リーダーの養成

学校組織マネジメント研修の強化

校長の学校組織マネジメントによる

校内研修

Ⅱ　受講生の自己省察を生かした教員研修の実際

Ⅱ－1　基本研修における自己省察の生かし方

1　研修講座名

初任者研修

2　研修の背景

初任者研修は，新任教員に対して教育公務員特例法第23条の規定に基づき，現職研修の一環として１年間の研修を実施するものである。教師としての使命感を養うとともに，教科指導の専門性を高め，実践的指導力と幅広い知見を得させることを目的とする。

3　研修の概要

初任者は，校外において総合教育センター等での研修（３泊４日の宿泊研修を含む）を，年間25日にわたって受けるとともに，校内において指導教員を中心とする指導及び助言による研修を，週６時間以上，年間180時間以上にわたって受ける。

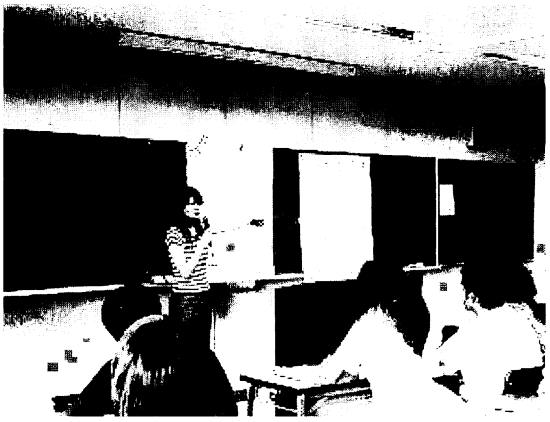
校外研修の概要（小･中学校及び高等学校，盲･聾･養護学校）は以下のとおりである。

回	小・中学校	高等学校，盲・聾・養護学校
1	初任者への期待，服務　等	開講式，教育長訓話，服務宣誓　等
2	軽度発達障害，情報教育　等	教科教育（1）
3	企業における社員教育，授業実践	学習指導要領，生徒指導・教育相談等
4	宿泊研修（1）	示範授業（1）
5	宿泊研修（2）	示範授業（2）
6	宿泊研修（3）	教科教育（2）
7	宿泊研修（4）	宿泊研修（1）
8	教育事務所における研修（1）	宿泊研修（2）
9	教育事務所における研修（2）	宿泊研修（3）
10	教育事務所における研修（3）	宿泊研修（4）
11	教育事務所における研修（4）	体験的学習（農業体験研修）
12	教育事務所における研修（5）	研究授業（1）
13	教育事務所における研修（6）	校種間交流（小学校）
14	教育事務所における研修（7）	校種間交流（中学校）
15	教育事務所における研修（8）	校種間交流（特・高）
16	教育事務所における研修（9）	情報教育，特別活動
17	教育事務所における研修（10）	国際理解教育，社会教育施設の利用
18	市町村教育委員会における研修（1）	生徒指導・教育相談，特別支援教育
19	市町村教育委員会における研修（2）	研究授業（2）
20	市町村教育委員会における研修（3）	人権同和教育，年間研究実践交流
21	市町村教育委員会における研修（4）	年間研究実践発表会
22	連携校における研修（1）	自主計画研修（1）
23	連携校における研修（2）	自主計画研修（2）
24	連携校における研修（3）	学校間総合ネットを利用した研修（1）
25	連携校における研修（4）	学校間総合ネットを利用した研修（2）

4　研修の特徴

初任者研修は，前述のように，使命感や専門性等々の観点から，様々な研修を実施するものであるが，ここでは自己省察の観点から，宿泊研修を取り上げる。

宿泊研修（３泊４日）では，一つの目標に向けて，共同して努力する活動を通して，自己観や他者観などの「観の転換」を図る意味から，登山活動や，ＫＪ法及びポスター発表によるテーマ別協議などを実施した。



特にＫＪ法によるディスカッションにおいては，「生きる力の育成」「個に応じた指導の実践」「共感的生徒指導」等のテーマについて，グループ別に熱心に討議を重ねる中で，各教員が自らにとって必要とされる資質能力に気付き，その習得に向けて努力することの大切さについて認識を深めた。

このような活動を通して，新任の教員一人一人が，各々の課題に正対しつつ自己を見つめるとともに，教員としての望ましい在り方について省察し，今後の職能発達の契機とすることをねらいとしている。

5　受講者の反応

・研修に一生懸命取り組むことができたことが嬉しかったです。楽しいことだけでなく，辛いことや，まじめな部分まで共有できる，その切り替えができる仲間というのは，本物だと思います。私は，こんなすてきな人たちが仲間であり，しかも同じ「教育」ということについて熱い想いをもっている同志であることが，本当に嬉しいです。

・この研修を通じて，人間関係の築き方などについて，自分が焦りすぎていたことに気がついたし，何よりも，そんな焦っていた自分を受けとめて，そして信頼してくれた仲間，見守ってくれた先生方のありがたさに気付けて，本当によかったと思います。

6　成果と課題

初任者研修は，職能発達の基礎を築くための極めて重要な研修であり，研修の目的をさらに高い段階において達成できるよう，今後一層の研修内容の充実を図る必要がある。

1　研修講座名

6年目研修

2　研修の背景

初任から5年を迎えた教員は，いわゆる教職基礎形成期（Ⅰ期）から，次の段階である教職資質向上期（Ⅱ期）に移り，日常の実践を積み上げ，意欲的に授業実践や学級経営に取り組む教師を目指す。6年目研修は，この第Ⅱ期のはじめの時期に，特に教科について自己の課題を見つけて研修する「課題解決型研修」と位置付けられ，日常の教職生活の中で抱えている問題点を解明し，それぞれの教育指導及び担当の校務をより効果的に推進するために必要な実践的指導力の向上を図り，また，学校組織の一員としての自覚を高めるとともに，教員としての使命感の高揚を図ることを目的とする。

3　研修の概要

対象者は，前年度末日までに教職経験が満5年を経過した教員及び前年度までの該当者で未受講の教員で，センター等での研修を3日間（他に在勤校研修5日間）実施する。

《センター研修日程》

①第一日目の日程

日　　程	研　修　内　容（小・中学校7月28日(金)）
10:00	オリエンテーション
10:20	講座の目的，趣旨，日程説明等
10:30～12:00	【選択研修】
	生徒指導・道徳教育・特別活動
13:00～15:00	教育相談における児童･生徒理解
15:00～16:00	人権同和・男女共同参画社会

日　　程	研　修　内　容（高校・特殊教育諸学校7月26日(水)）	
10:00	オリエンテーション	
10:05～10:30	講話「教職員の使命と責任」	
10:30～11:05	講義「教育課程･学習指導要領の趣旨」	「自立に向けた進路支援」（特）
11:15～12:00	講義「進路指導・キャリア教育」	
13:00～14:40	講義・演習「生徒指導・教育相談」	「教育相談」（特）
14:40～16:00	実践交流「ホームルーム経営」	「個別の教育支援計画の作成と活用」（特）

②第二・三日目は，10：00～16：00まで終日教科別分科会を行う。

4　研修の特徴

(1) 大学との連携

教育における諸課題への対応と教職員の資質能力の向上を図るために，岐阜大学教育学部と岐阜県総合教育センターは，平成13年度より，岐阜県総合教育センターの教員研修講座（6

年目研修等）の一部を岐阜大学を会場とし，大学教員を講師として連携実施している。その目的は，相互の機能を活用して実践的な研究と活動を行い，その成果を活かして教育の充実発展に寄与することである。連携の内容としては，①児童生徒の学習活動を支援するための研究，②教職員の資質能力の改善と向上を図るための研修，③社会の進展に対応した教育を推進するための活動，④その他，学校教育に関して双方が必要と認める事項である。

(2) 各教科における指導内容

各教科における指導については，次のような内容で実施している。

① 学習指導要領の理解・・・実践にあたっての課題

② 今日的な課題解決を図る学習指導計画の立案

（ア）各教科の今日的課題の把握と学習指導計画立案

（イ）授業実践に生きる評価の在り方の理解

（ウ）教科の見方や考え方を深める指導法の研究

③ 教科の専門性に応じた授業実践力の習得

（ア）教材教具の開発，課題解決学習･体験的学習の導入等による指導方法の工夫と改善

（イ）自ら学ぶ意欲を育て，主体的な学習を身に付ける学習過程の工夫と改善

（ウ）図書館やコンピュータ等の活用

5　受講者の反応

・現場ですぐに役に立つ講義をしていただき，たいへん勉強になった。今すぐにでもその授業がしたくなった。

・実践的な指導力を育成する6年目研修で，指導法についての話が聞けてよかった。

・授業力を向上させるために必要不可欠な，授業の分析のポイントを講義してもらい，とても参考になった。

6　成果と課題

○この研修で受けた講義内容を，早速，授業に取り入れたいという研修者もいて，意義深かった。

△研修者は，それまでの経験で授業を行なっていることが多い。しかし，教授法には様々あり，理論的な内容と授業における具体的な事例をもとにした内容で研修をさせ，理論と実践を結びつけた研修を行なうことで，研修者に授業改善の視点を持たせる必要がある。また，知識や技能の定着ばかりに重点を置いてしまったり，各領域の単元間のつながりを意識することが希薄になったりすることが考えられるので，今後は，教科の教材について学ぼうとする姿勢を身に付けさせたい。

○△特別支援教育において，6年目の教員は学校でも中心的な役割を担っており，障害の捉え方や指導・支援のあり方がこれでよいのかどうかを見直す必要な時期でもある。この観点からも，研修者にはとってはとても有意義であった。今後は，正しい障害認識とともに，実践に役立つような指導・支援方法を研修させる必要がある。

1　研修講座名

12年目研修

2　研修の背景

本県では，教育公務員特例法第24条に定められた「10年経験者研修」については，12年目研修として実施している。個々の教員の能力，適性に応じた研修を行い，教科指導や生徒指導等の力量，中堅の教員として学校経営に参画していく力など，幅広い教員としての資質や能力の向上を図ることを目的とする。

3　研修の概要

「休業期間中における研修」に相当する「共通・選択研修」を15日間，「課業期間中における研修」に相当する「在勤校等での実践研修」を20日間実施する。

共通・選択研修の日程（平成18年度）　※在勤校研修20日間は，各勤務校で実施

高等学校　盲・聾・養護学校

回	期　日	会　場　等	主　な　内　容
第１日	５月８日	総合教育センター	オリエンテーション・教職員の使命と責任　他
第２日	５～６月	学校間総合ネット	大学研修計画（学校間総合ネット）
第３日～６日	６～７月	学校間総合ネット	学校間総合ネット等を活用した研修①～③
第７日	７月25日	総合教育センター	教科指導
第８日～12日	７月～	大学等	大学研修①～⑤
第13日～15日	夏季休業期間中	課題ごとに設定	個々の課題に応じた研修①～③

小・中学校（※期日・会場は，小学校，中学校または教育事務所ごとに異なる）

研修の種類	主　な　内　容
総合教育センター等における研修	・オリエンテーション・教員の立場と役割，服務について，学校組織マネジメント等 ・中堅教員としての学校組織マネジメント，12年目教員への期待
教育事務所における研修	・教科指導等（各教育事務所の計画に基づく）２日
大学における研修 研修計画作成	・研修内容の具体化，課題に取り組む研修，研修のまとめ５日（大学，在勤校等） ・研修計画の立案，大学研修の計画作成２日（在勤校）
各自の課題に応ずる研修	県教委（総合教育センター）や，市町村教委，研究所が主催する研修・講座から選択受講，教科に係る総合教育センターHPによる研修等 自己の課題に係る勤務校の研究推進に関する研修等 ４日（在勤校，総合教育センター，市町村立施設等）

4　研修の特徴

12年目研修では，研修教員個々の能力・適性等に応じた一年間の研修を実施する。よって，各教員がこれまでの教育活動を振り返り，自己の抱えている課題を見出し，何を研修するか決めることが出発点となる。一年間の研修の流れは，以下の通りである。

①自己評価，校長による評価，研修計画書等を作成，自己の課題を明確化（５月）

②教科指導，生徒指導など共通した課題の研修（夏季休業前）

③個々の課題に応じた研修（夏季休業期間中）……岐阜大学教育学部等と連携して実施
④研修内容の在勤校での実践（夏季休業と冬季休業開始の間）
⑤事後評価，研修報告書を作成，成果と課題を明確化（２月）

教員個々の課題追究においては,専門的な助言を得て内容の深化を図る必要があることから，平成15年度より，岐阜大学教育学部と連携し，大学研修５日間を夏季休業期間を中心に実施している。大学研修の基本的な方向性は以下の三点にある。

①これまでの自らの実践を振り返り，自分の授業観，子ども観，教材観を見つめ，今後の実践をより発展的に展開する手がかりをつかむことを支援する。
②教師として自信を失いつつあるといった，教師の生き方にかかわる問題に直面している人への支援を行う。
③今後の実践の基盤となる専門的知識の向上につなげるとともに，研修生のニーズに対応した情報提供やアドバイスを行う。

各教員は，年度当初に自己評価，研修計画書を作成する過程の中で，自己省察を行い，一年間を通して追究する課題を見出す。そして，その追究にふさわしい大学研修講座を選択する。平成18年度，岐阜大学では教科教育や特別支援教育，教育相談等の７領域119講座が開設され，その中から受講教員が84講座を選択し，研修が実施された。

5　受講者の反応

・授業に活かせるかどうか，というレベルを超えて大変勉強になった。それは「教員」としてというだけでなく,「人」としての自分の生き方を問い直す機会でもあった。
・「自分が面白いと思ったことを生徒に伝えるのは大切なこと」という話を聞き，このような数学的活動を授業に取り入れることで，生徒の興味関心は限りなく高まった。
・まさに講義と実験ずくめの４日間であった。しかし，教師としてこなすべき様々な種類の仕事を忘れて専門分野に没頭できる楽しい４日間でもあった。
・今まで自分自身が受け持った不登校生徒への対応について勉強し直したいという気持ちでテーマを選び，新たな知識を身に付けることができた。

6　成果と課題

多くの研修教員が，在勤校を離れ，大学という専門性の高い機関において，これまでの実践において気付かなかった知見に触れることができ，個々の課題の追究，問題の解決を図ることができた点を評価している。一方，以下のような課題点が見られる。

①特定の講座に希望者が集中する。
②「商業」,「工業」など，高等学校の専門教科指導に対応する講座がない。
③夏季休業中ではあるが，在勤校の行事や職務のため，希望する講座と日程が合わない。

12年目研修の大学研修は，教育委員会と大学という異なる機関の連携という点で，他の研修に比して運営は容易ではないが，問題点，課題等を一つ一つ見直し，改善することによって今後も発展を図っていきたい。

Ⅱ－2　学校組織マネジメント研修における自己や学校の振り返り

1　研修講座名

中堅教員学校組織マネジメント講座（主任等）

2　研修の背景

1998年９月に出された中央教育審議会答申「今後の地方教育行政の在り方について」では，学校の自主性･自律性の確立に向けての課題として学校の裁量権限の拡大とともに学校運営組織の見直しを揚げ，その一環として校務分掌の改善および主任制の見直しが指摘された。ミドルリーダーたる主任等は，学校活動を活性化していくうえでの，まさにキーマンであるという観点に立って，裁量権限の拡大を十分に発揮できる校内体制づくりと学校経営におけるリーダーシップが期待されている。

2000年には，教育改革国民会議報告において，「学校運営を改善するためには，現行体制のまま校長の権限を強くしても大きな効果は期待できない。学校に組織マネジメントの発想を導入し，校長が独自性とリーダーシップを発揮できるように」ということが指摘され，現在はつくば市の教員研修センターをはじめとして，各地域でミドルリーダー（主任等）を対象とした学校組織マネジメントの研修が展開されている。

3　研修の概要

目　的：校長を中心とした学校運営体制の確立を図るため，中堅教員に対し学校組織マネジメントに関する研修を行い，自己や学校の振り返りを通して，学校経営に主体的に参画できる人材を育成する。

対　象：中堅教員（主任等の立場にあるもの）

期日等：平成18年６月22日(木)，11月２日(木)　岐阜県総合教育センター

日程	研　修　内　容	講　師
6/22 (木)	〔講義・演習〕 「これからの学校づくりと学校組織マネジメント」 ～集団のよさをいかした教育力の向上のあり方～ ・教職員一人一人と職員集団（組織）の活性化 ・価値ある授業の模索 ・学校組織開発の展開（組織マネジメントの展開） ミッションマネジメントとPDCA，SWOT分析等	名城大学大学院 大学・学校づくり研究科 主任教授 木岡 一明 氏
11/2 (木)	〔グループ協議，全体発表〕 ・４か月間の実践の成果と課題について実践交流 ・発表，講師の指導・助言	同 木岡 一明 氏

4　研修の特徴

①２日間の研修の間に実践期間を設ける連続講座とする。１日目と２日目の研修の間は，１日

目の研修で得たことを基に，自己や学校を振り返り，自校の課題を探求する研修期間とする。受講者は，1日目の研修で得たことを各学校で実践し，2日目の研修には成果や課題解決のための改善策を持ち寄り，グループ等で研究・協議することを通して，これまで校内だけで考えていたときには気付かなかった工夫や改善策をとらえ，組織マネジメントの考えを生かした学校経営の進め方のよさを実感することができる。これによって，研修と実践の連動が図られる。

②講義とグループ協議・演習を効果的に組み合わせる。受講者の問題解決の進捗状況を捉えながら必要な内容の講義を行い，グループでの協議や演習だけでなく，共通の問題が生じる頃には全体で講師と議論する場を設ける。

③場面に応じたシートを活用し，研修内容を深める工夫をする。例えば，2日目の研修に臨むに当たって，自らの課題は何か，あるいはどこまで解決したのか，研修でどこまでわかったのかを明らかにするために，課題探求用のシートを活用する。

5　受講者の反応

次の2人の受講者の感想に表れているように，2日間の連続講座の間の実践を通して，自校での取り組みを振り返る期間を設けたことと，演習や小グループによる研究・協議を取り入れ，課題探求型の実践的な内容にしたことは好評であった。

・今までも，研修の中でマネジメントの必要性は聞かされてきたが，十分に理解が出来ないところが多かった。しかし，今回は1日目の理論部分の学習に加え，2日目には演習が組まれ，具体的な課題を念頭に解決策を探求する研修ができて有意義だった。

・講義にとどまることなく，自校についての振り返りや，考察したことを演習や小グループで交流することができ，具体的かつ実践的な研修だった。

6　成果と課題

ミドルリーダーは，分掌や学年のリーダーとして，担当する業務の充実とメンバーの意欲の活性化，協動体制の構築という役割を，企画・立案，連絡・調整，指導・助言といった機能を通して実現することを期待されている。したがって，ミドルリーダーに対する組織マネジメント研修に，ファシリテーターとしてのスキルを学ぶ機会を取り入れていく必要がある。また，今年度，教育センターの多くの講座に組織マネジメント研修を取り入れることができたが，今後は個々の研修をより有機的に結びつけていくことが求められる。

Ⅲ　専門性を高める教員研修の実際

Ⅲ－1　自己の課題解決を図る授業力向上を目指した研修

1　研修講座名

授業力向上講座（中・国語）

2　研修の背景

学習状況調査結果やＰＩＳＡの調査結果から明らかになった，「自ら言語能力を高める力の育成」や「読解力の向上」を踏まえ，具体的で実践的な手立て等を研修し，今後の授業の工夫・改善に生かす必要がある。

3　研修の概要

目　的：中学校国語科において，確かな言語能力を育成するために，授業の工夫・改善について実践的な研修を行う。

対　象：国語の授業の進め方に課題を感じている中学校教諭

期日等：平成18年10月３日(火)　岐阜大学教育学部附属中学校

日　程	研　修　内　容
10:00～10:35	開講式　講座の目的，趣旨，授業者の紹介 オリエンテーション　本時の授業について，国語科の課題
10:45～11:35	公開授業参観　１年１組「古典との出会い」曽我部 領史 教諭
11:45～12:30	授業研究会
13:30～14:45	課題グループ別実践交流会（①教材開発　②学習過程　③評価　④個に応じたきめ細かな指導）
15:00～15:45	全体研修　「授業の工夫・改善のための一方途」の講義と演習 ・文学的文章（全体を貫く課題の設定，特徴ある表現の比較） ・説明的文章（文章を構造的にまとめること，二つの教材文の比較） ・詩歌（連作指導，作者の背景を知ること）
15:45～16:00	アンケートの実施等

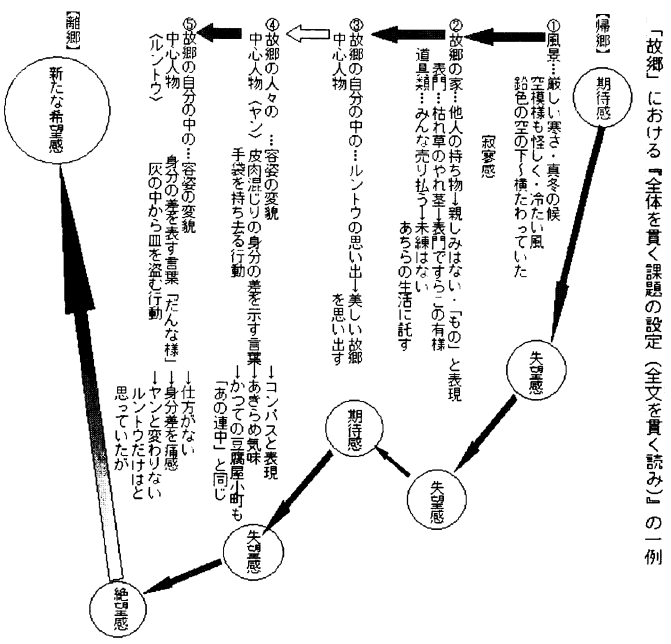
4　研修の特徴

(1) 受講者が課題意識をもって講座に臨み，また，その課題を担当者が把握するために，課題項目を明らかにしたものを事前提出資料とした。前年度のアンケートから「教材開発，学習過程，評価，個に応じたきめ細かな指導」に課題を多く感じていることが分かったので，この４項目のどれについて，授業改善を試みたかを明らかにした。

(2) 課題解決が，より図れるように「授業改善を行った授業参観・課題別グループ実践交流会・全体交流会（全体研修）」という形式をとった。講義中心の講座から，より受講者が主体的に参加でき，生徒を目の前にした具体的な指導の在り方が分かるものとした。グループ内の受講者が共通の視点で授業参観を行い，課題解決について自校生徒の実態を踏まえながら交

流を行うことで，より課題解決が図れることを目指した。

(3) 明日から実際に使えるような「授業の工夫・改善の一方途」の提供を考えた。講座当日以降の指導計画に盛り込まれているものをモデル単元（教材）として取り上げた。また，教材開発の一つとして前回の教科書教材と今回の教科書教材の比較を行うことを示したり，文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改めるために全体を貫く課題の設定を示したりした。



5　受講者の反応

【受講後】

・マンネリ化した自分の教材研究に別の光が入ったように感じ，新鮮な気持ちになれた。

・一人ひとりの実践レポートについて指導が頂け，満足している。

・グループ別で，互いに気になっていたことが質問でき，理解が深まった。

・実際の授業を見て「自分ならどうするか」と考えられた。

【一ヶ月後】

・導入時に全体を貫く課題を意識して学習活動を展開するように心がけた。子どもたちは大変喜んで取り組めていた。

・古典の導入に「興味をもたせる」内容を生かした。生徒たちは「古典っておもしろい！」「好き！」という思いをもつことができた。

・感銘を受けた「故郷」の資料分析を３年生の実際の授業の中で活用した。自分の今までの授業では全く触れることのなかった視点だった。

・市教育研修会の場で，講座資料を配付し，研修内容を報告した。

6　成果と課題

○事前に受講者の課題を把握していたことがグループ分けや全体研修の資料作成に有効であった。また，受講者に一ヶ月後のアンケート（還元度アンケート）を実施したが，上述のような報告をいただき，成果を確認できた。

△受講者の中には，「グループ交流と全体研修」「授業参観と授業研究会」を日にちを分けて実施してほしいという要望もあったので，今後検討していきたい。

1　研修講座名

授業力向上講座（中・社会）

2　研修の背景

学習状況調査（平成15年度より県教育委員会が実施）を踏まえ，生徒一人一人に「文章資料，図表等を深く読み取る力」や「論理的に考察し，自分の考えを適切に表現する力」を付けるために，具体的な授業や実践を基に研修し，授業力の向上を図る必要がある。

3　研修の概要

目　的：自ら調べて考え，社会的なものの見方や考え方を育てる社会科の授業の工夫・改善（教材開発，学習過程や評価，個に応じたきめ細かな指導等）について実践的な研修をする。

対　象：社会科の授業の進め方に課題を感じている中学校の教員

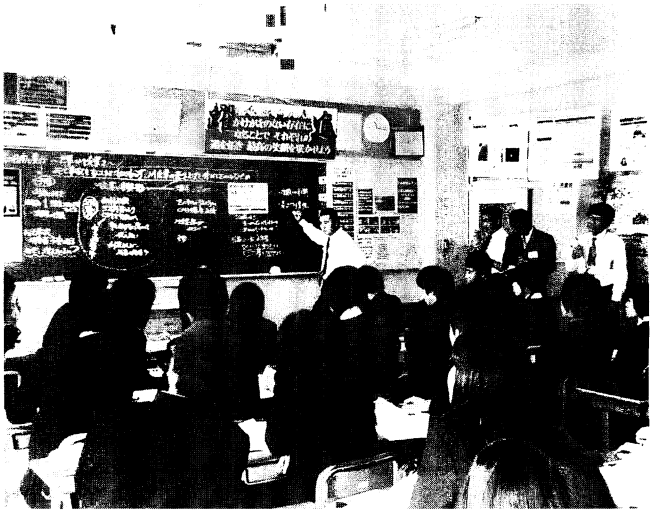
期日等：平成18年10月31日（火）　岐阜市立長良中学校

日　程	研　修　内　容
10:00～10:20	開講式　講座の目的，趣旨，授業者の紹介 会場校　学校長挨拶　日程説明等
10:30～11:20	公開授業参観３年４組「わたしたちのくらしと経済」林 健司 教諭
11:30～12:10	授業実践者による講義 ・授業づくりポイント　・学び方育成のポイント
13:10～14:20	参観授業について
14:30～15:20	実践交流　「私の授業改善」
15:20～15:50	・生徒の課題意識を明確にする導入の在り方 ・新たな見方・考え方を獲得する交流の在り方 ・授業の役割を明確にした学習過程の在り方 ・表現力育成のための指導の在り方　等
15:50～16:00	アンケートの実施等

4　研修の特徴

受講者が日頃の授業の中で課題としてとらえ，自ら授業改善として取り組んでいることの解決を主目的としている。そのために，次のように講座を構築した。

①受講者は事前に「私の授業改善」についてのレポートを講座担当者宛に提出する。講座担当者は，その改善のポイントに沿った話ができるよう，資料等を用意する。



②授業者にも,参加者の実態を伝え,「文章資料,図表等を深く読み取る力」や「論理的に考察し,自分の考えを適切に表現する力」を育てるための授業の公開を行う。また，授業後に当日までの授業づくりや学び方育成のポイントの講義や質疑応答の時間を位置付ける。

③実践交流では，実際に使用した実践資料や生徒の姿を基にして，受講者が授業改善の交流を行い，成果を共有し，課題について互いに助言をする。

④受講者が各学校に戻ってから授業実践をし，校内の教員に成果を広げるとともにその成果を講座担当者に報告する。

5　受講者の反応

・研究授業から多くのことを学びました。中学校３年生ならあそこまでの姿になるというイメージが得られました。学び方を体系付けて，生徒に指導したいです。

・知りたかったことや日頃どうしようか悩んでいた部分が解消できた気がします。講座を通して，内容が，生徒の姿，実践体験などの具体的なものであったことが，明日からやってみようと思えることにつながりました。

・単元の構造化について，どういう考え方が根底にあるかを知ることができました。授業力向上のために，授業設計を今一度再考し，生徒が「分かった」「できた」「楽しい」と感じることができるように，努力していきたいです。

・授業を支える学習団づくりについても，実践をもとに話がしてもらえたので，よく分かりました。

・受講後は，個人追究の場面での資料の読み取り方，ノートのまとめ方などの指導に力を入れました。そのため，事実と事実をつなげる力が伸び，全体交流での生徒の発言が増えました。

6　成果と課題

○「資料を読み取る力」や「論理的に考察し,それを表現する力」については，それを系統的に，そして継続的に指導していく必要があることを具体的な実践を通して研修することができた。

○受講者の実践を基づいて研修を進めたことにより,「実際にやってみたい」「実践に生きた」等の声が数多く聞かれた。

△この研修のよさや成果を，いかに広げていくかを考えることが必要である。

1　研修講座名

授業力向上講座（小・算数）

2　研修の背景

学習状況調査（平成15年度より県教育委員会が実施）により明らかになった，算数，数学における指導上の課題「数学的に表現する力の育成」「よりよい考えを目指して考えを交流する学習活動の充実」を踏まえ，具体的な手だて等を研修し授業力の向上を図る。

3　研修の概要

目　的：児童一人一人が学ぶ楽しさと充実感をもつことができる算数の授業を構想し実践する力の向上を目指す。

対　象：算数の授業の進め方に課題を感じている小学校の教員

期日等：平成18年10月４日(水)　岐阜市立長良西小学校

日　程	研　修　内　容
10:00～10:15	開講式　講座の目的，趣旨，授業者の紹介 会場校　学校長挨拶　日程説明等
10:15～10:30	公開授業についてのオリエンテーション　研修課題について
10:45～11:30	公開授業参観　１年５組　「たしざん」　又賀 明彦 教諭
11:30～12:00	参観授業について
13:00～15:00	・追究意欲を喚起するための問題との出合わせ方 ・主体的な追究をするための見通しのもたせ方 ・考えを練り上げていくための解決方法の把握と児童の考えの組織化 ・筋道立てて考える力を育てるための学習活動 ・まとめの在り方と考え方のよさを味わわせるために
15:00～15:45	算数授業構想（実習）講座のまとめ
15:45～16:00	・アンケートの実施等

4　研修の特徴

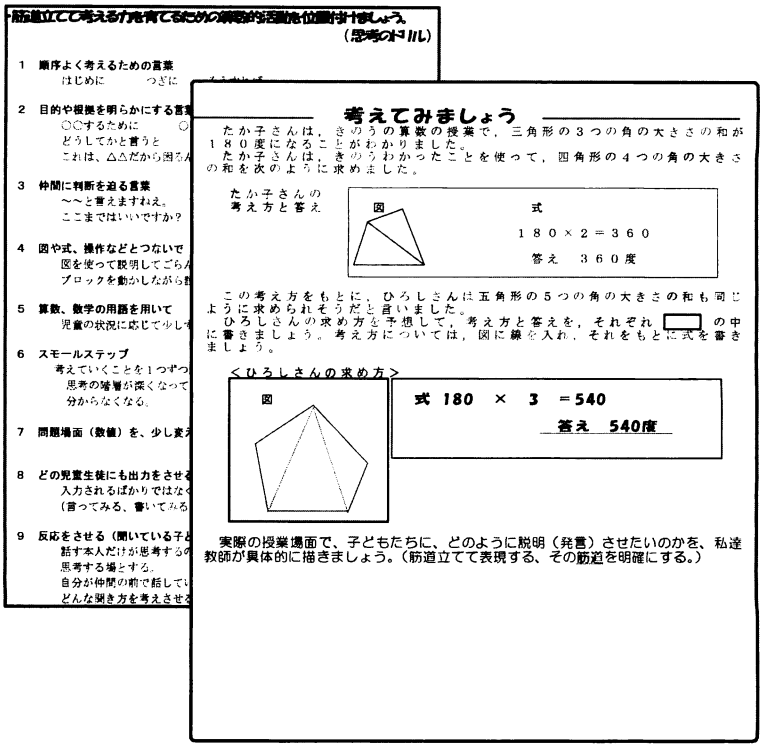
受講者の自己省察を促すために，「自身の日頃の算数指導を見つめ直したり，優れた事業を参観したりすることで，課題とすべきことを自覚する機会を位置付けること」「指導上の課題と自覚した内容について，明確な指導の手立てを研修できるようにすること」「研修後の授業で研修内容を実践し，指導力の向上が実感できるようにすること」が肝要であると考え，以下のように講座を構築した。

①受講者は事前に「算数の授業を行う上で，指導上の課題と感じている内容」について講座担当者あて提出するとともに，提出された「指導上の課題」に応える指導を受ける。

②「数学的に表現する力を育てる授業」「よりよい考えを目指して考えを交流する授業」を参観し，目指したい児童の姿を明確にするとともに，公開授業を基にした教師の具体的な指導のあり方を研修する。

③「数学的に表現する力」を育成するための学習活動や「よりよい考えを目指して考えを交流する」ことができる学習指導案の構想をたてる。

④受講者が各学校に戻ってから授業実践し，校内の教員に広げるとともにその成果を報告する。


筋道立てて考える力を育てるための戦略的活動を位置付けましょう。
（思考のドリル）

1 順序よく考えるための言葉
はじめに　つぎに

2 目的や根拠を明らかにする言葉
○○するために
どうしてかと言うと
これは、△△だから困る

3 仲間に判断を迫る言葉
～～と言えますね。
ここまではいいですか？

4 図や式、操作などとつないで
図を使って説明してごら
ブロックを動かしながら

5 算数、数学の用語を用いて
児童の状況に応じて少し

6 スモールステップ
考えていくことを１つずつ
思考の幅が深くなって
分からなくなる。

7 問題場面（数値）を、少し変え

8 どの児童生徒にも出力をさせる
入力されるばかりではなく
（言ってみる、書いてみる

9 反応をさせる（聞いている子と
話す本人だけが思考する
思考する場とする。
自分が仲間の前で話してい
どんな聞き方を考えさせる

考えてみましょう

たか子さんは，きのうの算数の授業で，三角形の３つの角の大ささの和が１８０度になることがわかりました。
たか子さんは，きのうわかったことを使って，四角形の４つの角の大きさの和を次のように求めました。

たか子さんの考え方と答え

図

式
１８０×２＝３６０
答え　３６０度

この考え方をもとに，ひろしさんは五角形の５つの角の大きさの和も同じように求められそうだと言いました。
ひろしさんの求め方を予想して，考え方と答えを，それぞれ □ の中に書きましょう。考え方については，図に線を入れ，それをもとに式を書きましょう。

＜ひろしさんの求め方＞

図

式 180 × 3 ＝540
答え 540度

実際の授業場面で、子どもたちに、どのように説明（発言）させたいのかを、私達教師が具体的に描きましょう。（筋道立てて表現する、その筋道を明確にする。）

5　受講者の反応

・学び方について，ここは指導しきれていると思っている点でも，改めて講話を伺うと，指導の詰めの甘さがあることに気付いた。子どもの姿をよりレベルアップさせるための手だてが明確になりました。明日からがんばろうと思います。

・クラスの子どもたちの様子を思い浮かべ，これまで自分がやってきたことをふり返るとともに，今後の方向を具体的に示していただきました。今までにこのような研修は参加したことがなく，これならば明日からでも生かしていけると実感しました。

・「筋道立ててどのように話させたいのかを教師が描いていないことには，子どもにそのような表現がさせられない。」まさにそのとおりだと思います。当たり前のことですが，目からウロコでした。来年も必ず受講します。

・授業の中に仕組みがあることが大切だと思いました。子どもが勝手に考えを高めていくのではなく，意図的にどのような問題と出合わせると良いのかが分かってきました。子どもの意識を描くことが大切だと分かりました。

6　成果と課題

○受講者からは，自分の指導上の課題を解決することができたという感想や，明日から即実践してみたいという感想が多く出された。また，実践後のメールからは，「筋道立てて話せなかった子が，少しずつ順序よく話すことができるようになってきた。」「職員会や，研究会などで研修内容を他の教員に広げている。」などの報告をいただいている。

△受講申し込みが60名を超え，１回の講座開催ではそのニーズに応えきれなくなっている。

1　研修講座名

授業力向上講座（小・理科）

2　研修の背景

学習状況調査（平成15年度より県教育委員会が実施）により明らかになった理科における指導上の課題「科学的に追究する力の育成」「考えを練り合い科学的な見方や考え方を高める考察の指導」を踏まえ，授業において改善するための具体的な方途等を研修し，授業力の向上を図る必要がある。

3　研修の概要

目　的：小学校の理科における，指導計画の作成の仕方や授業を展開する際のポイントを理解し，今後の授業改善，理科指導の在り方を考え，実践に生かす。

対　象：理科を専門としない教員や理科の基本的な学習過程や授業の各段階での基本的な指導・援助について学びたい教員

期日等：平成18年９月28日(木)　岐阜市立長良西小学校

日　程	研　修　内　容
10:00～10:15	開講式　講座の目的，趣旨の説明，学校長挨拶，授業者紹介等
10:15～10:30	授業オリエンテーション
10:45～11:30	公開授業参観　５年生単元「流れる水のはたらき」竹内一教諭
11:30～12:00	授業研究会　授業の工夫・改善のポイント
13:00～14:00	授業研究会　授業者による「わたしの授業改善」
14:00～15:45	理科の授業指導上の課題とその改善 ・導入や終末の事象提示の在り方 ・見方や考え方を高める観察・実験の視点 ・観察，実験中の指導・援助の仕方 ・子どもの発言やつまずきの捉え方
15:45～16:00	閉講式　アンケートの実施

4　研修の特徴

受講者が「日頃の理科授業で課題と感じていること」の課題解決を主目的とした研修を行う。そのために，次のように講座を構築している。

①受講者が授業での指導上の問題点を自己省察し，その解決に向けて実践を焦点化するために，事前に「日頃の理科授業で課題と感じていること」を記述し提出する。

②受講者が明日からの授業に生きる実践的な方途を身につけるために，課題解決型の講座として講座担当者が全ての課題に対して具体的な資料を用意する。

③受講者が願う子どもの姿は日常の小さな指導の積み重ねであることを把握するために，授業者と授業に至る子どもへの具体的な指導を語ってもらうよう打合せる。

④受講者が自らの課題解決に結びつけ，視点をもって参観できるようにするために，公開授業

前に見たいポイントを授業者に伝える場を設定する。

⑤受講者が学んだ指導をもとに授業で自らの専門性を高めることができるようにするために，講座担当者は具体的な授業場面を提示して指導法を教授する。

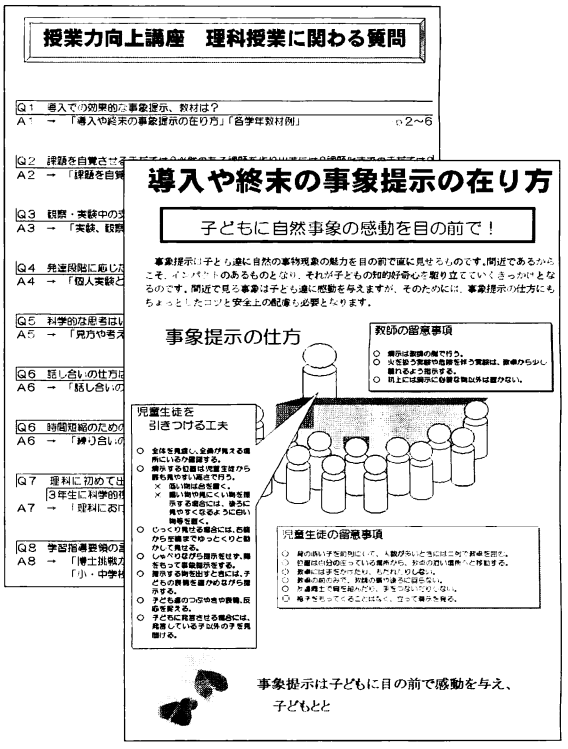
⑥受講者が研修後も自ら指導上の課題を意識し，それを解決していく力や教科の専門性を高める指導力を培うために，研修終了後，実際の授業場面において学んだことを生かしていくように意識化させる。

5　受講者の反応（研修終了後アンケート）

・抽象的なことではなく，すぐに生かせることや普段なかなか聞くことが出来ない指導のポイントを学ぶことができ，納得した上で明日から生かせる。

・自分がこれまでに迷っていたり悩んでいたりした問題に丁寧な説明がされ，特に事前の質問に対して一つ一つ分かりやすい資料で話を聞くだけでなく，実際の実験を目の前でやってもらうことで詳しく理解ができた。

・導入の在り方として学んだ提示の仕方の具体例を６年生単元「大地のつくり」で実践し，提示の仕方一つで集中力・興味が変わっていくことを二つのクラスで実感できた。



6　成果と課題

○受講者の実践上の課題を事前に聞き，それに対する具体的な解決策の提示に焦点化したことで，受講者のニーズに応えることができた。

○打合せで講座の趣旨の理解を図り授業者が語る内容と受講者が求める情報を一致させたことで，授業の具体を通して学ぶことができ説得力を高めることができた。

△少ない人数であっても受講者の抱える課題は複数あり，多岐に渡るため，受講者の人数が多くなると，一人一人のニーズに応えきることが難しくなる。

△授業者との入念な打合せと公開授業，その後の授業研究会への出席など時間的な確保などにおいて，授業者に負担をかける部分が多い。

1　研修講座名

美術館活用講座～授業に役立つ図工・美術鑑賞指導法講座～

2　研修の背景

幼稚園，保育園，小中学校，高等学校の図工・美術教育で育てる大切な力は，「感じたことを工夫し表現する力」「技能を活用していく力」「よさや美しさを感じ取っていく力」である。この３つの力を育てるためには，表現と鑑賞の一体化を図り，鑑賞活動における指導法を研修し，「作品の見方・考え方・感じ方」を育てることが重要である。

3　研修の概要

目　的：図画工作や美術の鑑賞活動における指導法を，美術館の作品や資料を使って実践的に研修することにより，授業での活用を図る。

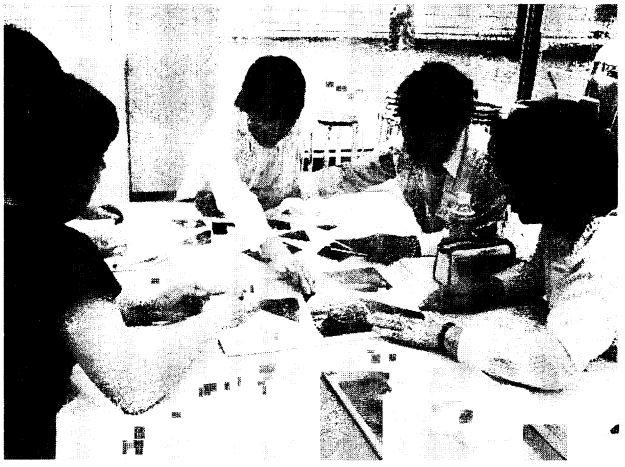
対　象：鑑賞活動に課題を感じている幼稚園，保育園，小学校，中学校，高等学校，特別支援学校，各種専門学校の教員

期日等：平成18年６月21日(水)　岐阜県美術館　実習棟等

日　程	研　修　内　容
10:00～10:10	オリエンテーション ・講座の目的，趣旨，日程説明等
10:10～12:00	美術作品鑑賞の理論と方法 ・教育活動と美術鑑賞　・美術館の教育利用（館内見学含）他
13:00～16:00	授業に役立つ鑑賞活動の事例と演習 ・各種アートゲーム　・対話型鑑賞法（展示室にて） ・鑑賞活動の授業づくりのポイントとヒント
16:00～16:30	講座のまとめ ・意見交流とアンケート等

4　研修の特徴

受講者が授業で行っている鑑賞活動の中で，「どんな資質・能力が児童生徒に身に付くのか，表現と鑑賞の一体化をどう図っていくのか，児童生徒の見方・考え方・感じ方をどう引き出すのか」等課題に感じている事に対して，実践的な演習（アートゲーム，対話型鑑賞法等）を通して，教師自身の授業での指導法を研修することを主目的としている。



①鑑賞活動の演習（各種アートゲーム，対話型鑑賞法）を通して，鑑賞活動を進める上でのポイントを実践的に体験する。

②鑑賞活動の授業づくりのポイントを具体的な指導案を通して研修し，学習指導案作成の構想を交流する。

③美術館所有の作品を活用し，学芸員との連携を図り，効率的，効果的な演習を実施する。

④幼稚園から高等学校まで幅広い教員の相互交流を通して，系統的な図工・美術の鑑賞指導法を研修する。

⑤受講者が各園・学校に戻ってから，授業実践を行ったり，他の教員に広げるため研修の成果を報告する。

5　受講者の反応

・私自身の中で，よさや美しさを感じ取る力の育て方が課題であったが，まずは，一人一人の見方，感じ方，考え方を受け止めていくことが大切であると分かりました。

・子どもに作品を見せるポイントが指導上の課題であったが，演習を通して，一つの作品から色々な想像，空想を広げるための手だてが必要であると実感できました。

・アートゲームや対話型鑑賞法の演習はとても楽しく，作品に親しむことが鑑賞指導には大切であると実感しました。私の課題が解決でき，学校に戻り実践したい。

・工夫ある教材で研修ができたり，本物を見て鑑賞できたことは，とても良かった。子ども達にも，具体的な資料や作品を鑑賞させることが重要であると実感できました。

・幼児の造形活動でも，心を磨き，感性を育てるのに鑑賞指導が大切であると実感できました。

6　成果と課題

○アートゲーム，絵のパズル，対話型鑑賞法の演習を通して，鑑賞指導を進めていく上で，子ども達の素直な感想を大切にしながら，作品の見方，考え方，感じ方を広げていくことが，表現活動を支えていく大切な力であることを研修することができた。

○美術館を活用し，所蔵している作品や，学芸員の方のもっている知識を生かすことができたことは，効果的な研修となった。

△どんな作品を使い，１単位時間でどのように指導していくのか具体的な事例を通した研修が不足していた。受講申込者が多く，開催回数の検討が必要である。

1　研修講座名

授業力向上講座（中・技術）

2　研修の背景

教育課程実施状況調査や教科主事会の情報から，県内中学校の指導の実態として「指導と評価の一体化」「学び合いの組織化と基礎的・基本的な内容の定着との関連」が課題であるととらえた。そこで，こうした課題を克服するために，同教科担当教諭が一つの授業を基にして具体的な指導の手立てを明確にできる研修が必要である。

3　研修の概要

目　的：生徒一人一人が，実感を伴って基礎的・基本的な内容を身に付けることのできる授業を構想し，実践力を高める。

対　象：中学校教諭（技術科担当）の希望者

期日等：平成18年10月25日(水)　岐阜市立東長良中学校

日　程	研　修　内　容
10:00～10:10	開講式　会場校校長挨拶
10:10～11:10	授業参観　第１学年「収納ラックの製作：おねじ切り」　堀 高哉 教諭
11:20～12:20	授業研究 ・ねらいと評価規準の整合性，学習活動と学習過程，指導と評価の一体化，個の学習活動を支援する教具等
13:30～14:30	実践交流 ・個に応じたきめ細かな指導を推進するための援助･助言の在り方 ・実感を伴って基礎的･基本的な内容を身に付けるための学習環境の整備（題材化の考え方と教材・教具の開発等）
14:40～15:45	・今日的な課題と授業づくりのポイント
15:45～16:00	・講座のまとめとアンケートの実施

4　研修の特徴

①研修者が，教師と生徒の姿から具体的な指導方法を視覚でとらえられることを目的として授業を参観する。その際，県内の指導の実態と本研修の意図を授業者に伝え，研修内容の重点化を図った授業を公開いただく。

②研修者が抱いている課題を解決することを目的として，公開授業の具体的な指導を見つめ，学習活動や学習過程，評価と個に応じたきめ細かな指導，学び合いの組織化，学習環境の整備等について検討する。また，検討された内容をもとに，他の実践にも応用できるよう一般化を図る。

③相互のアイデアを学び合い，必要に応じて各々の実践に生かすことを目的として実践交流を行う。その際，研修者が開発した教材・教具，授業で使用した資料，生徒作品を用いて，開発の意図，指導法（活用方法），生徒の反応，成果等を明確にする。

④指導案を作成する手順や考え方を明確にすることを目的として，授業設計シートを使った演習を行う。その際，ねらいと評価，学習活動の一貫性が図れるよう１場面を取り上げ，検討しながら指導案を作成する。

⑤研修で学んだことを実践に生かし，各市町村の教科研究会等で他に広めることを目的として，還元度アンケートを実施し実践のポイントをまとめる。

5　受講者の反応

・授業参観を通して，生徒のよい姿に大きな感動を味わった。個別指導の在り方，問い返しなどにより指導と評価の一体化が図れることを実感できた。

・基礎的・基本的な内容を「確認すればよいこと」「教えるべきこと」「気付かせること」に分類してねらいを考えることを知った。このことは，生徒の既習学習や実態をもとに整理することが大切であるため，実態把握の方法も工夫したい。

・課題化の方法が勉強になった。今後，生徒の意見を中心に展開していけるように個別指導を交えながら進めていきたい。

6　成果と課題

○生徒の学習に向かう目，発言，問いかけの反応，生徒同士のかかわりが多く見られ，素晴らしい授業であった。こうした授業を参観することにより，目指す授業像が明確になるとともに，実践の意欲化にもつながるなど，授業構築の手法の一つを学ばれたと考える。

○授業場面は「おねじ切り」であった。教師自身は，おねじ切りの技能のポイントをつかんでいるはずだが，指導の難しさを感じている場面である。特に「切り始め」に難しさがあるが，ダイスの形状から，棒材の面取り（テーパー）が大きなポイントであることを学ぶことができた。こうした技術の本質についても研修を積むことができた。

△受講者は，初任者から25年目の教師まで年齢層が広かった。経験年数に応じて課題としている内容にも差があり，今回は経験年数の少ない先生方を対象とした研修になってしまった傾向がある。今後，内容を明確にして対象を絞るとともに，事前の実態調査等も取り入れながら，受講者のニーズに対応できる手立てを準備したい。

1　研修講座名

授業力向上講座（小中·家庭科）

2　研修の背景

教育課程実施状況調査より明らかになった，家庭科授業に対する指導上の課題「自分なりに工夫して，つまづきを乗り越えていこうとする子どもの育成」「主体的に課題に取り組み解決していこうとする子どもの育成」を踏まえ，具体的な手立て等を研修して授業力の向上を図る必要がある。

3　研修の概要

目　的：子どもたちが主体的に学ぶ力を身につけるための指導過程のあり方や,自分で工夫し，新たな考えや技能を身に付けていく事ができるような題材開発のあり方を研修し，教師の授業力向上を図る。

対　象：家庭科の授業の進め方に課題を感じている小中学校の教員

期日等：平成18年７月24日(月)，８月21日(月)　岐阜県総合教育センター

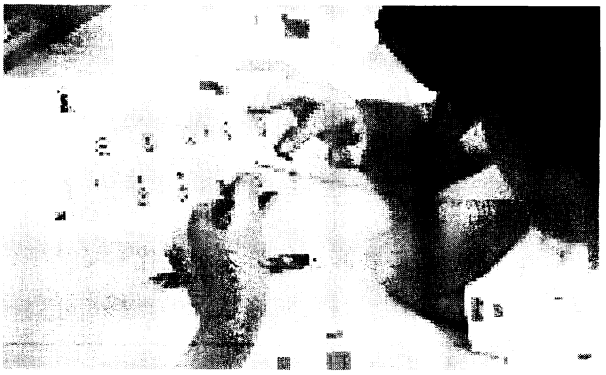
日　程	研　修　内　容（７月24日 小学校）
10:00～11:00	(模擬授業Ⅰ)「授業力とは何か～家庭科授業の課題～」 ・「課題作り」「質の高い話し合いの作り方」「個に応じた指導」「発言と発言のつなぎ方」「聞き方」「話し方」「構造的な板書の仕方」を模擬授業の中で具体化し，自分の実践の課題を明らかにした。
11:00～12:00	(講話)「家庭科の学び方～実践から学ぶ～」 ・講師：大垣南小学校　長澤美穂子教諭　「住まい」の実践より ・課題選択のあり方，学級の一員として友だちと関わりあいながら課題を解決していく授業展開のあり方等，実践を通して研修を深めた。
13:00～15:00	(模擬授業Ⅱ)「指導と評価のあり方」【５年生「役に立つ小物作り」】 ・付けたい力を明確にした教材のあり方等，模擬授業Ⅰで研修した内容を実際の教材で演習した。 ・題材導入のあり方について実際の授業をもとに協議した。
15:00～16:00	(新たな考え方や技能を身に付けていく事ができるような題材開発) ・自分の学級や地域の実態に応じた題材開発の実際を実技を通して行った。

4　研修の特徴

①自己省察を生かした研修にするために，各実践者が自分の授業についての課題を明らかにする過程と，改善の手立てを自ら見つけていく過程に重点を置く。そのために，「模擬授業」を２回設ける。１回目の模擬授業では，授業の各段階の節目におけるポイントを具体的に示したり，受講者からの質問に対し，実践で答えたりしながら十分に協議する。受講者は自分の授業作りの課題を，実践を通しながら明らかにする。その後，実践者の講話や題材開発の演習で研修を深め，２回目の模擬授業につなげる。２回目の模擬授業は，今までの研修内容

を生かし，実際の題材で実践する。この過程を経ることで，自分の授業スタイルを見つめ，課題を改善しながらモデルとなる授業像を目指すことができる。

②２回目の模擬授業は，「主体的に課題に取り組み解決していこうとする子どもの育成」を目指すために，担当者の開発した題材で授業を行う。題材は，教科のねらいを実現するための重要なポイントであることを，実感を通して理解することができる。また，地域の実態に即した指導を進めるためにも，受講者が学校へ戻ってから，題材を見直す契機となる。こうした新題材での模擬授業を通して，家庭科としての専門性を高める研修とする。



③講義主体の研修ではなく，受講者が自ら課題を見付け，主体的に解決していくことができるような研修にする。そのために，解決の手がかりとなる実践資料や教材･教具を準備し，受講者のニーズに応える。また，受講者と講師，受講者同士の実践交流の場と時間を確保し，互いに学びあいながら授業成立のための要素をつかめるような，課題解決型研修とする。

5　受講者の反応

【当日の講座を終えて】

・家庭科の授業において大切なこと「問題解決的な学習を通して，自らの生活を創造していく力を培う学習展開のあり方」を学んだ。自分の中で不確定だったものが（題材観，指導計画のあり方，授業展開等）すっきり明らかになった。

【各学校に戻ってから実践を終えての報告】

・研修した内容を，２学期の家庭科の学習で生かすことができました。１学期よりは，安心して家庭科の授業を行なうことができています。

・研修で開発した一つの題材で，実際に体験できる過程を各種取り入れ，生徒の創意工夫の力を育てることを大切にしました。

6　成果と課題

受講者が自分の授業のどこに課題があると認識したのか，まず実態を把握するとともに，受講者の授業力を量っていくことで，講座終了時には「何をどうする」という具体まで，踏み込むことができた。今後は，特に中学校の教諭の授業力向上を目指し専門性を高めるような具体的な指導のあり方を研修する内容を構築する必要がある。

1　研修講座名

専門教育指導力向上研修講座Ⅰ～計測・制御（中高連携型研修）～

2　研修の背景

平成15年度から開始された普通教科「情報」に関わる科目は，生徒の興味・関心の多様性を考慮して選択的に教育課程に編成できるようになっている。科目選択の状況を全国的に見た場合，開始当初は「情報A」の履修が殆どであったが，次第に「情報A」から「情報B」もしくは「情報C」に履修バランスが変化してきている。（表１）

表１　全国の科目履修状況の推移

年度／科目	情報A	情報B	情報C
平成15年度	83.8%	7.6%	8.6%
平成16年度	81.7%	8.4%	9.9%
平成17年度	75.4%	10.6%	14.0%

このバランスの変化は，中学校段階における指導内容が充実・発展してきていることと大きく関係していると考えられる。

高等学校においては,「情報B」もしくは「情報C」への対応が必要となってきており,特に「情報B」の計測・制御の分野は実施上の課題となっている。

また，中学校技術・家庭科の技術分野「B情報とコンピュータ」には，選択して履修するプログラムと計測・制御に関わる項目として,「コンピュータを用いて，簡単な計測・制御ができること」と示されているが，生徒が理解し易い題材の提供が実施上の課題となっている。

3　研修の概要

目　的：計測制御実習装置の製作と中高の実践交流により，生徒の発達段階に応じた適切な教材提供のあり方について研修し,「計測・制御」分野の指導力を向上させる。

対　象：中学校で「技術・家庭科」を担当する教員，高等学校で「情報科」を担当する教員

期日等：平成18年６月30日(金) 岐阜県総合教育センター　則武情報分室

日　程	研　修　内　容
10:00～12:00	中学校段階における「計測と制御」の取り扱い 高等学校段階における「計測・制御」の取り扱い 実践交流
13:00～16:00	制御装置の製作（USB 接続の入出力装置） 制御装置を用いた実習（VBA による制御） まとめ

本研修を受講する者は，研修前の段階で自分がどのような実践を行っているのか，関係分野の実践事例を提出し，実践交流を行う。そして，具体的な装置の製作と実習を行う。

一日しかない研修であるが，勤務校で実践を行うように意識付けをして研修のまとめとしている。

4　研修の特徴

本研修では，学習環境に左右されがちな教科指導の課題を具体的な題材を提示しながら解決の糸口を見いだすことをねらいとしており，研修者が勤務校における実践事例を持ち寄り，他の学校との情報交換を行う事で自己の振り返りができる。

また，現場ですぐに活用できる具体的な題材制作及び実習を体験することによって，新しい指導案を開発する意欲を高められるよう工夫している。

さらに，中学校技術・家庭科の技術分野の担当指導主事と高等学校情報科の担当指導主事がそれぞれの立場で連携協力しながら企画・立案している事も大きな特徴である。校種が異なっていたとしても，同じ題材を取り扱う想定で意見交換すると，指導の違いが見えてくる。例えば，中学校段階では計測・制御が生徒の関心を大きく引き寄せる題材であり，プログラミングの指導などに効果的に使用できる。高等学校段階においては，シミュレーションへの適用や，情報社会における計測・制御の役割について考察させる指導の展開になる。この指導の違いを意識する事が教科指導のあり方を議論する上で非常に重要である。

5　受講者の反応

8名の受講者のアンケート結果は，表3に示したように比較的良い結果が得られた。

表3　アンケート結果（抜粋）

	十分満足	ほぼ満足	やや不満	不満
研修の目的達成度	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%
研修内容について	87.5%	12.5%	0.0%	0.0%
講師について	75.0%	25.0%	0.0%	0.0%
時間設定	25.0%	62.5%	12.5%	0.0%
教育技術の向上	62.5%	37.5%	0.0%	0.0%

また，研修成果の生かし方については，「早速授業で用います」や，「モデルの一例として提示したい。また，シミュレーションの課題の一つとして取り入れられないか，検討したい」など，具体的な題材を取り上げた効果が得られている。また，満足できた点について「自分自身のスキルを向上させることができた。中学校の取り組みを聞けたことがよかった。」のような自己の課題解決に役立てられた事が分かる回答も得られた。

不満な点については，「実習の時間が不足していた」など活動時間の充実を望む意見が多かった。

6　成果と課題

研修者に確認したところ，製作した機器を用いた授業が実施されていた。このことから，自己の課題を見つめ，課題解決のヒントとして実施した研修内容による授業実践が結果として専門分野の指導力の向上に繋がったと評価できる。

今後は，研修者の主体的な活動を拡充する内容に改善する予定である。また，計測・制御以外の指導項目であるマルチメディアの分野（情報C）への対応についても選択の幅を広げる必要がある。

Ⅲ－2　学校の課題解決を図るための校内研修の活性化

1　研修講座名

校内研修推進リーダー養成講座

2　研修の背景

教員や学校の課題解決を図る研修の在り方を考えたとき，教育センター等に集まり一般的・理論的な面を重視する校外研修に対して，課題を共有し合う職員同士が学校で個別具体的・実践的に行う校内研修が，自己や学校の改善を図る研修として注目されている。研修内容には，職務上の共通理解を図るための知識習得や研究に係る授業研究等の身近なテーマが取り上げられているが，研修方法には，学校の課題解決に向けて教員同士がアイディアを出し合って議論する協働活動を取り入れ，お互いの気付きを基に自己を高め合うワークショップ形式への改善が望まれている。特に高等学校においては，組織が大きく教科の専門性が高いため校内研修が実施されにくい土壌があり，学校の課題解決の推進に当たる教頭にはファシリテーターとしての能力が求められている。

3　研修の概要

目　的：各学校の課題に対応した校内における研修のしくみをつくり，教員同士による学校の活性化や指導力の向上を図るとともに，各学校が抱える課題を解決する校内研修のリーダーを養成する。

対　象：全高等学校・特殊教育諸学校の教頭

期日等：平成18年７月10日(月)，12月20日(水)　岐阜県総合教育センター

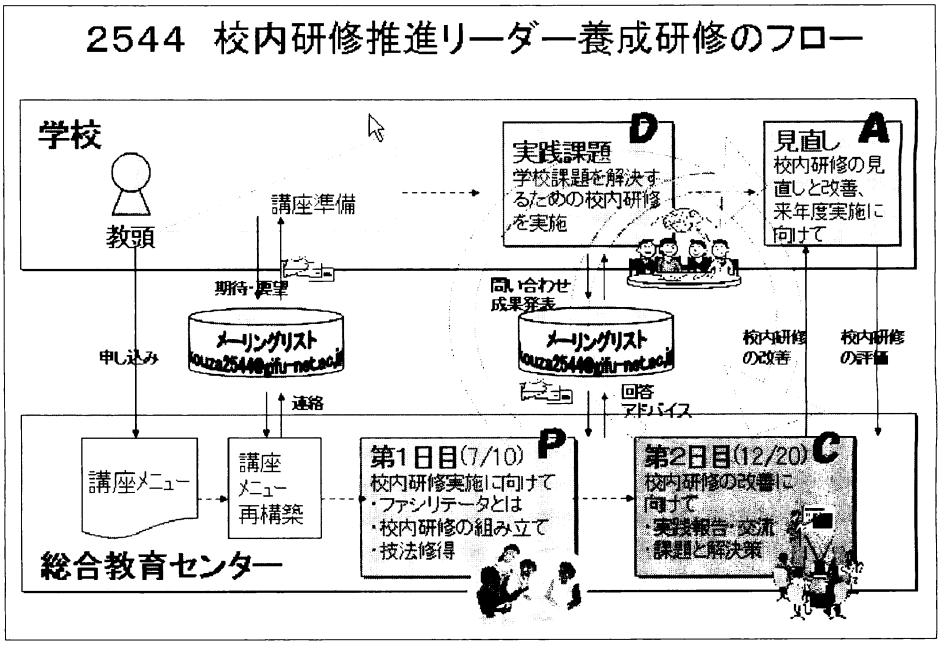
日　程	研　　修　　内　　容
7/10(月)	講義「校内研修推進リーダに求められるもの」 演習「職員参画型の校内研修を進めるために」 ・学校組織マネジメントをベースとしたワークショップ型研修の推進 ①自校の可能性と期待の再認識（ミッション探索） ②自校を取り巻く内外環境の把握（ＳＷＯＴ分析） ③組織マネジメントの視点を生かした取組事例の紹介 ④職員の意識・意見の集約方法（ポスターセッション）
12/20(水)	演習「校内研修の取り組みについての実践交流」（グループ演習） ・自校での取り組みの振り返り ・ワークショップ型研修実施に係る意見交流

4　研修の特徴

①研修ではミッション探索やＳＷＯＴ分析を体験する内容を取り入れた。これは新たな手法で受講者が勤める学校の内外環境の分析を行い，学校課題を再発見・再認識することで自校の解決すべき目標を明確に設定させることにねらいがある。また，これらの学校組織マネジメ

ントの手法は，学校における実践において在勤校の職員の参画意識の高揚を促し，気付いて学ぶ職員参加型の校内研修を構築するのに役立つ。

②研修と学校の実践にＰＤＣＡのサイクルを位置付けた。教育センターでの研修と学校での実践の繋がりを明確にして，受講者が学校で意欲的，継続的に課題探求ができるようにした。理論を学び実践を通して自校を見つめるサイクルで，課題解決が図れるようにして行きたい。さらに，受講者がお互いに意見交換ができるようメーリングリストを立ち上げ，各自が取り組んだアイディアの提供や疑問を解決する場を設けた。



③研修では講義形式を避け，ワークショップ形式やグループ演習を多く取り入れ，自ら体験したり，他者の実践から自己の課題解決への気付きを促すようにした。グループ演習は，他者からの学びの場と位置付け，時間の確保と交流機会の提供を大切にした。

5　受講者の反応

・学校課題解決のためにどの様に校内研修を行えば良いのか実践を通して体験できた。
・教員一人一人の意欲を引き出し日頃の課題に向けた活動を促すためには，職員参加型の校内研修が大切であると実感した。

6　成果と課題

教育センターのワークショップ形式での演習で自校の課題を認識し，その後学校での実践を積んで解決を図る研修システムは効果的に働いた。受講者は課題を解決する方法に気付いたり，他者からの学びによって自校の課題解決を図ることができた。

一方，教育センターと学校を繋ぎ，第１日目と２日目の研修を埋めるためにメーリングリストを立ち上げたが，受講者の活発な意見交換には至らず改善の余地を残した。